

科学とは

科学とは

市川治療室 No.106/2000.01

.....

サイエンスとはもともと何かといえば、ラテン語の *scientia* で知識そのものを意味している

scientia は、*scio* (知る) の名詞系であり、サイエンスとは、本来、知ること全体、知識の総体を示しているのである。

領域に分割した局所的な知識を持つことがサイエンスなのではない。ところがサイエンスの現場を見ると、日々に領域細分化はますます進み、専門家になればなるほど、自分の領域しか目に入らなくなっている。

つまりプロフェッショナルなサイエンチストとほど、局所的知識者であり、真のサイエンチスト (全体的知識者) ではなくなりつつあるという逆説が成立するようになっている。

これは困ったことなのである。知の大海を航海する人類が乗り合わせた船には、担当種目別の多くの先頭がいるにはいるが、その全体を見渡している船長がいない。

全体を見渡すことに専念していて、その船がどこに進もうとしているのか現状をよく把握しており、そこに何らかの不都合があれば、すぐにしかるべく手を打つことができる人間がいないのである。

・・・サイエンスの領域が異なると、基礎的なものの考え方の違い、方法論の違い、基礎概念基礎的用語法が違うから、その領域の学問を少しでもかじったことがある人と、そうでない人とではほとんど外国人同士みたいなことになってコミュニケーションがとれない。

・・・日本の科学教育は、どこかで根本的に歯車を狂わせてしまったために、子供達を世界一の科学嫌いにさせてしまった。そう言う子供達を科学嫌いから回復させるチャンスを与えることなくそのまま大人にしてしまったから、日本人は子供から大人にいたるまで、世界で 1, 2 を争う科学嫌い、科学離れの国になってしまっている。

・・・科学というものは、本来おもしろいものである。わかれば、そんなに面白いものは無い。何がどうなっているかを知りたいというのは、人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、その本性に突き動かされてできあがったのが、科学という知の全体像なのだから、これがおもしろくなかろうはずはないのである。

もちろんわからなければ面白くないし、わからないものをわからなくてもよいからとにかく覚えるというようなプレッシャーをかけられたら (一貫してそれをやってきたのが日本の科学教育ならぬ理科教育だった)、面白かろうはずがない。

私は、ヴィトゲンシュタインの「語りうるものはすべて明晰に語りうる」という言葉の信奉者で自分の特性は、難しいことをわかりやすく語ることにあっていると思って、この仕事を続けてきた。

.....

上記は立花隆氏が著書 (今月紹介した本) にかかれている文章です。

昨年この本を読んで、三石巖先生のお宅で学習会に参加していた 17 年前を思い出しました先生が立花氏とまったく同じことを言われていたからです。

三石先生は次のようにも言われていました。

『科学はごまかしがきかない。
身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。それは科学の問題だからである』

『一般市民の頭を科学の方向に誘うための有効な手段の一つは
科学の方法を用いた健康管理の書物＝情報である』

三石先生や立花氏とまではいなくても
今年も科学的な健康管理の情報をお伝えしたいと考えています。